「南方漁場の開拓者「原耕」の像」　鹿児島県枕崎市

枕崎市（松之尾公園内）

原耕は、南方鰹漁場の開拓者、枕崎水産業発展の功労者として知られる。

明治９年鹿児島県坊津町の鰹漁業等の経営者の家に生まれ、大阪高等医学校を卒業後、外国航路の船医を経て、枕崎市で外科医を開業した。生家の持ち船が明治 38 年、39 年と続けて沈没し、合わせて 39 名の乗組員が死亡した海難事故があり、遺族の生活を維持するため医業のかたわら鰹漁業の経営に乗り出した。我が国漁船の動力化の最初は明治 39 年であるが、原耕は、漁船の動力化と大型化を図るため、明治 39 年には発起人の一人として枕崎造船所の設立に参画した。漁船の動力化は、海難事故の減少をもたらす一方、新船建造や他県船の南下による漁場の競合、さらには不況による魚価安が加わり、大正時代後期には枕崎等の鰹漁業は経営が困難になり倒産も増加した。

原耕は、このような状況を打開するため、新しい漁場の開発が不可欠と考え、大正 13 年に当時の常識を超える 91 ㌧の大型船を建造し、沖縄近海、台湾近海、フィリピン近海の漁場開発に当たった。さらに、昭和２年の第一次南洋漁場探検から、３度にわたり南洋漁場探検を行い、日本の漁船として初めて赤道を越えた。第３次探検では、マルク諸島アンボンに加工場を含む漁業基地を建設し、その途中、昭和８年に悪性マラリアに冒され急逝した。この間、２期に渡り衆議院議員を務め、特に遠洋漁業の振興に尽力した。

南方漁場の開発に際しては、私財を投入するとともに自ら乗船し、睡眠を削っても観察や調査を怠らなかった。乗組員は航海が長くなることを嫌ったが、原耕は、船内環境の改善を図り、また、乗組員や家族、水産関係者に実態を知ってもらうための活動写真（無声映画で弟が弁士を務めた）をつくり、鰹漁業の知識普及を図った。

南さつま市（坊津歴史資料センター）

南さつま市坊津歴史資料センター、枕崎漁港、枕崎市松之尾公園の他、原耕が建設の先駆となった南方漁業の根拠地であるインドネシアマルク諸島のアンボンに建立されている原耕の像や碑は、彼の業績を今に伝えている。

みどころ

- **南薩地域地場産業振興センター・枕崎お魚センター・枕崎市かつお公社：枕崎ならではの新鮮な魚介類・海産物を中心とした海鮮市場、 かつお料理を中心とした食事、 かつおのタタキ・フィレ等の製造工程の見学などを楽しめる。**